

## 内野美洋氏に聞く 地方都市における、弁理士業務の多様性



首都圏や関西圏では、個人や事務所ごとに業務の得意分野が専門分化しがちだ。その実態の是非はともかく、経済規模など諸条件が異なる地方都市で、弁理士業務はいったいどのように遂行されているのだろうか。

今回はこのテーマで福岡市の松尾特許事務所に所属する内野美洋氏を訪ね、お話を伺った。

伊藤 関西の稲岡会員から寄せられた推薦文を拝見しますと特許から商標にわたる幅広い分野の出願業務だけでなく、権利移転登録業務、訴訟前の相談業務、無効審判や異議申し立て等の当事者系事件、さらに侵害訴訟事件の補佐人など非常に幅広い業務を手がけられているとのこと。このようにとても幅広い業務は地方独特なのでしょうか？

内野 地方では特定のクライアントの仕事だけを扱ってはい仕事になりません。クライアントの顔ぶれは個人の方から大手企業まで幅広い。仕事の件数では大手企業からの依頼が半数を占めますが、クライアント数は、中小企業や個人の方の数が断然多いですね。つまり、社内に特許部とか知的財産部といった特許関連の部署を持たない規模の企業が大半です。

業務内容はやはり特許出願が中心ですが、意匠や商標もありますし、クライアントからの相談はどんなことにでも耳を傾けます。地方という市場そのものが

“何でも相談を受ける”必要性を創りだしているのです。

神奈川から福岡へ

伊藤 もともと地方都市で全般的な業務をしたいとお考えだったのですか？

内野 福岡に来たのは仕事というより単にここに住みたかった、という理由からです。キヤノンに勤めていた時、夏休みの長期休暇を使って学生時代の友人を訪ねて福岡に遊びに来ました。福岡は都会的な繁華街がある一方で、電車で20分も乗ると田園風景が広がり、ちょうど都会と田舎の折衷といった雰囲気がある土地で、住みやすそうに思えました。私が子供時代を過ごしたのは新横浜なのですが、昔は自転車で田んぼの中を走り回って、おたまじゃくしを捕って遊べた。自分がそんな子供時代を過ごしたので、子供も田舎の風景がある土地で育てたいと思いました。当時はまだ独身でしたが、その数日後に知り合った九州出身の女性と結婚しました（笑）。私は生まれも育ちも神奈川県で30年間神奈川で生きてきた人間ですが、九州とよほど深い縁があったのでしょうか。

最初は東京の事務所に入って弁理士の資格をとってから九州で独立、という計画でした。しかしどうせ九州に行くのなら早いほうがいいと考えなおし、福岡圏

内のすべての特許事務所に履歴書を送りました。そして縁あって松尾特許事務所に入ったわけです。

### 思い通りに“自分”を生きる

伊藤 キヤノンでは開発関係のお仕事をなさっていたということですが。

内野 開発部門で“発明提案書”という明細書に似た内容の書類を作って提出していました。弁理士という存在はキヤノンに入社するまでまったく知らなくて、“発明”といえば“エジソン”程度の認識しか持っていませんでした(笑)。それでも自分で特許申請に関わるようになると、次第に特許が身近になっていきました。

伊藤 それで弁理士に興味を覚え、勉強するようになられたのですか？

内野 実は、入社後間もなく先輩に「弁理士って何ですか？」と聞きました。すると先輩が「特許申請の代理業務をする仕事で、金が儲かる仕事だ。試験は大変だけど、そりゃあ儲かるらしいぞ」と答えた(笑)。さっそく会社帰りに書店で弁理士に関する本を立ち読みしました。しかし、たまたま手にした『合格体験記』に書かれているのは「10年目でやっと受かった」とか「4年間テレビも見なかった」とか「家庭を犠牲にしてようやく合格できた」というハードな話ばかりで、自分にはとても無理とあきらめました(笑)。

しかし、しばらく設計業務を続けていくうちに「このまま勤めていても設計のプロになれるわけじゃないな。そのうち管理職になって人が描いた図面にハンコを押す生活が始まるのか…」と憂鬱になりました。やはり私は経験が活かせ、一生続けることのできる仕事がしたかった。ちょうどその頃、父が57歳で亡くなりました。私が当時28歳だったので、父は私の倍の年齢で亡くなったわけです。もしかすると私の人生も残り半分しかないのかもしれない。そうだとしたら、思い通りに自分の人生を切り拓いてみたい。そう思ってもう一度書店に行き、今度は資格取得の本を買って(笑)勉強を始めました。会社に秘密で2年間ほどこっそり勉強しましたが、仕事との両立は難しく、特許事務所に勤めた方が早い、と思って転職したのです。

### 社外の知的財産部として

伊藤 ご出身は工学系とお聞きしています。実際に

特許事務所に入られて、仕事の幅広さに驚かれたのは？

内野 ええ、驚きました。弁理士業務には特許だけでなく意匠や商標の予備知識も必要、ということを知っていたのですが、実際にこの事務所に入ってみると、それがすべて実践されている。機械専攻だったので機械系の特許申請を専門にやるかなんて簡単に考えていましたから「地方ならなんでもやるのは当然だ」と教えられ、カルチャーショックを覚えました。

地方では、クライアントが業務内容に応じて事務所を使い分けることはまずありません。包括的にすべて相談される。だから、クライアントとの話から仕事が生まれます。クライアントのほとんどは中小企業で、特許や商標に関する専門部署も持っていません。ですから、我々はクライアントにとって、知的財産部的な役割を担うこともあります。当然クライアントとの関係は密接になりますね。出願依頼に従って明細書を作成して出願するという事務的な流れで行う仕事はほとんどありません。また、こちらから「ここはこうとらえた方が特許出願がしやすいですよ」といった知的財産の掘り出しもやります。裁判関係でも訴訟を専門に手がける事務所は九州には無いので、そういう仕事も受けます。

伊藤 毎日、打ち合わせの連続ですね。

内野 近年、大手で設計も現地工場内でやる企業が増え、九州で特許申請するケースも増えています。最近出張も多いですね。九州では、最新設備の工場が



インタビュー 伊藤孝美

バーンと建っている横で、地元のおじいちゃんがせっせと畑を耕している。最先端と伝統が同じ風景として溶け合っているのを見るのは、なんとも不思議でどかな気分ですよ(笑)。

伊藤 まさに東奔西走といった感じですね。最新の技術や法律事例を勉強する時間はとれますか？

内野 インターネットがあるので大体のことは書籍に頼らず手早く調べられます。特許庁のホームページでも検索できるので楽です。情報入手に関して特に問題はないですね。地方だから不便と感じるのは…特許庁の面接に頻繁に行けないことぐらいかな(笑)。

また、昨年からは弁護士と弁理士の共同研究会を結成し、勉強会を始めました。法律と知的財産に関する情報交換をしています。また、弁理士試験に合格した同期が私を入れて福岡に3人いるので、彼らと一緒に勉強会をやっています。3人でやれば、それぞれ役割分担して期日までに本や資料を読めますから。



### オールラウンドプレイヤーの醍醐味

伊藤 今まで手がけられた中で、特に印象に残る事件はありますか？

内野 意匠権侵害で争った事件がありました。福岡地裁で争っていて、無効審決が出たら裁判も勝てる、という状況でした。そのための準備書面を書いている時は「絶対に勝てる！」という意気込みでいっぱいなのですが、いざ口頭弁論終結という段階になると、裁判長の一言一言が妙に気になってくる。「あの言葉はこちらを勝たせるために出たのか、それとも向こうを勝たせるためなのか？」というふうになんか(笑)。審理終結から判決までの心理はまさに弁理士試験と同じようなもので、やっている時は夢中だけれど、終わった途端に「果たしてあれで良かったのか？」と期待と不安が入り混じった気持ちで、発表を待つ心理に共通します。結果は勝ったのですが、勝った時も試験の合格発表と同じで喜びと安堵感でいっぱいでした。まさか試験で味わった感覚を弁理士になってからも味わうとは思いませんでした(笑)。

伊藤 一般的に、技術と違って、意匠・商標の業務は主観が入るので、戸惑った点もあるのではないのでしょうか。そこのところはどうお感じになりますか？

内野 やはり最初は戸惑いました。特許はある程度筋道を立てやすいのですが、意匠や商標は審査官と自分の感覚にギャップを感じる事が多くありました。事務所には実績がたくさんあるので、所長と相談しながら進めています。

伊藤 訴訟問題に広がりそうな場合、弁護士とはどう連動して仕事を進めていくのですか？

内野 クライアントが希望する弁護士に状況を説明しながら一緒にやる場合もあるし、特に指定が無ければ状況に適した弁護士をこちらで選んで進める場合も

あります。九州には特許事件の経験がある弁護士が少なく、首都圏の弁護士と組むケースもあります。

弁理士法の改正にも関わってきますが、地方では訴訟全般を弁護士がリードし、弁理士は技術的なことだけサポートするという補佐的な立場では通用しません。技術的内容の判断以前に「特許侵害事件とはこういうものだ」と法律的判断を弁護士に説明することもある。弁理士法の改正で“訴訟代理権”ができ、地方で仕事をする者にとっては業務がやりやすくなるでしょうね。

### 次世代に何を伝えるか

伊藤 大学に講師として呼ばれることもあると伺いました。学生の特許に対する認識はいかがですか？

内野 特許法という法律があることさえ知らない学生が大半でしたね。大学側も今までのように論文だけではなく、特許を出していかなければという考えが出てきたようです。彼らは論文を書くことには慣れていても、特許出願に関する流れについては知らないことが多い。そこで説明にお伺いするわけです。論文と明細書では書き方も違います。論文では細かいデータを中心に説明する機会が多いのですが、明細書はそうはいきません。技術の本質を適確にとらえなくてはなりません。細かいデータに基づいて、重要なことだけ書いて、一般的なことは全く書く必要がないと考えていらっしゃる方もいます。

もともと大学の先生は技術が完成して論文発表できる段階になって、はじめて「この技術で特許をとろう」と思われるようです。だから「技術の裾野は広く、成功だけでなく、失敗も特許のタネになることもあるのですよ」と説明し、論文ができる前から出願の準備を進めるようにしています。“アイデアも特許になる”という感覚が、今まではなかったようですが、最近は知的財産に関する講義を始めた大学も増えてきたようですから、今後、知的財産に関する認識は着実に変わっていくでしょうね。

内野 また、昨年、今年と続けてデザイン科の学生に意匠権に関する講義をしました。大学側の狙いは「将来、社会に出て製品デザインを手がける上でどんな心構えが必要かについて、法律的に認識させる」という趣旨でしたから、実務的な講義をしました。講義では実際に意匠公報を見せ「こうやって創作者の名前が世の中に出ます」と言うと、彼らの目が輝きました。彼

らは、素晴らしい技術やデザインでなければ対象にならないかと思っていました。“たまごっち”や“Mac(アップルコンピュータ)”など身近な事例を紹介しながら話を進めました。楽しかったですね。「優秀なデザイナーとは、他人に模倣できない優れたデザインを創作するだけでなく、他人に模倣させない知識にも秀でた者をいう」との提言をしてきました。好評だったようです。

### 未知の技術を掘り起こす

伊藤 お話を伺うと地方で仕事をするデメリットはまったく感じられず、むしろ経営者や技術者の方と密接につながって仕事を進めることができるというメリットを羨ましく思うほどです。このフィールドで力を蓄え、今後どのように仕事をしていきたいとお考えですか？

内野 まだ九州の中小企業では特許に関する認識が高いとは言えないので、クライアントにとっての社外特許部・知的財産部的役割を担っていく必要がある。企業の成長を通して、自分も成長したいです。特許権は地域性が関係ない権利なので、九州の一地方の小さな工場からでも世界に通用する技術をアピールできる。特許はそんな大きなチャンスを手に入れる手段となることを伝えていきたいし、そういった仕事を十分にやれる人間が地元にならなければならないことを浸透させていきたいですね。大手の地元出願が多くなり、地元事務所とつきあう企業も増えてくるでしょう。その時に「やはり地方の事務所じゃダメだな」と言われたいようしかりやっていきたいです。

また、クライアントとの話の中でいつも感じるのは、現場の技術者はそれぞれの業務に関しては誰よりもス



松尾所長と打合せ

ペシャリストだということ。彼等と話し合いながら、個々の技術からチャンスを開き出す醍醐味は格別です。しかし、工場では目を輝かせて熱く語りかけるのに、事務所に来られると緊張してかきこまってしまう方もいます。もっと気軽に、お互い腹の底から話し合える関係を築いて、知的財産の発掘をしたいですね。

それから今、毎週木曜日に、九州の弁理士7人が交替しながら“発明無料相談会”を行っています。この相談会では1人でコツコツ発明を続けている方やまだ知られていない技術や知識をお持ちの方など、日ごろ事務所には来られないようなタイプの方に会うことができます。また、実際に特許事務所の敷居は非常に高らしく、「すごい技術じゃないと相手にされないだろう」等と思っている方が多いようです。相談者数も意外と多いですよ。基本的に発明は誰にでも出来るし、地域性も関係ない。東京や大阪じゃないと発明できないなんてことはないわけですから。いろいろな方と話して発明のタネに出会うのは楽しいですよ。

伊藤 特許事務所の敷居を低くするのも、我々若手弁理士にとって大切な役目なのかもしれません。

### 楽天家のリフレッシュ

伊藤 最後にプライベートに関する質問ですが、休日の過ごし方を教えて下さい。やはり勉強中心ですか？

内野 いえ、子供相手に遊びに出かけることが多いですね。それから、最近はゴルフが趣味です。福岡は市内から車で30分ほど走ればいいコースがたくさんありますから。

伊藤 ハードな仕事の中で、いつ、どんな方法で自身をリフレッシュさせるのですか？

内野 根が楽天家らしく、特にリフレッシュの必要性を痛感したことはありません(笑)。業務の内容が高度でナーバスになればなるほど「またひとつ新しい知識や経験が身につくぞ」とワクワクしながら毎日仕事をしています。自分のフィールドに地方都市を選んで本当に良かったと、最近つくづく思います。

伊藤 お話を伺って、弁理士の仕事の幅広さ、奥深さを再認識させて頂いたような気がします。本日はありがとうございました。

(取材・構成 森 熊太郎)